

キャリアと文化の心理学

(2) 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー

土元哲平

筆者はこれまで、大学生・大学院生の人生移行(転機)におけるキャリア支援に関する研究に取り組んできた。特に、教師と学生という関係性に焦点をあて、オートエスノグラフィーというアプローチを用いて、教員志望学生の人生移行を促すためのキャリア支援を検討してきた。本稿では、筆者の博士論文『転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー』(土元, 2020)の研究成果の概要を紹介する。なお、本稿は博士論文の要約に加え、その後の研究進展を踏まえて一部内容の修正・補足を行っている。

博士論文研究の目的

転機は、ある人の生き方・キャリアにとって重要な意味を持つ、特定のきっかけや経験の結びつきを指す。転機に類する表現として、「禍を転じて福となす」(戦国策)という故事成語がある。これは、「わざわざをうまく処理して、かえって幸福な結果が得られるようにする」という意味である(新漢語林 第2版)。転機という用語における「転」は、ある状況が他の状況へと変化すること(特に、好転すること)を、「機」はその「機会」を示している。筆者の博士論文研究の主題は、「転機」の過程と、転機を促す「キャリア支援」の理解であった。人がある出来事を、どのように「転機」として意味づけ、成長のための媒介としていくのか、そのための他者(特にキャリア支援者)の働きかけはどのようなものかを明らかにしていくことがこの研究の主要な関心であった。具体的には、以下の2点を目的とした。

1. 筆者自身の転機経験および転機におけるキャリア支援経験を記述的に理解する
2. 大学生・大学院生(特に教員志望学生)の転機におけるキャリア支援への示唆を得る

なお、「キャリア」という用語には、“フルタイムでの就労経験”という職業的な側面に焦点化した定義や、「生涯の過程を通じて、ある人によって演じられる諸役割の組み合わせと連続」(Super, 1980, p.282)のような広い定義がある。本研究においては「キャリア」を、これらの意味だけでなく、「他者との関係の中で『成長』してきた経験」という意味としても用いる(特に第6章)。ここでいう他者には想像上の他者、歴史上の偉人、本、なども含まれる。TAE(Thinking At the Edge)には、「体験と言語シンボルを丁寧につきあわせ、既存の言語シンボルに個人が発見する複雑な意味を含ませて」(得丸, 2010, p.12)いくことで、新しい意味や単位を創造していくという志向がある(得丸, 2010)。すなわち、こと

ばの意味や定義が複数存在することは問題ではなく、むしろ、経験を意味深く意味づけたり、新しい意味を創造するために必要であると考ええる。

博士論文研究の考え方の基盤と全体構成

本研究では、人生の転機(移行)の経験と、転機を促すキャリア支援に関する研究を行う。そのために、文化心理学という考え方を基盤として転機研究の視座や方法を検討し、オートエスノグラフィー研究の視座や方法を活用して現象に迫っていく。文化心理学では「人が文化に属する」のではなく「文化が人に属する」と考える(木戸, 2019)。すなわち、外的に与えられ、個人と独立に存在する“容器”としての文化ではなく、個人が(時には他者とともに)主体的に創り上げる“道具”としての文化を考えるのである。

文化心理学、転機研究、オートエスノグラフィー研究の関係は、これまであまり顧みられてこなかったが、転機は個々人の人生にとって重要な意味を持つ、自己変容のプロセスであることから、オートエスノグラフィーとして、主観的な意味に迫っていくことの意義がある。このような着想をもとに、この博士論文においてオートエスノグラフィーによって筆者自身の「転機」の文化理解を試みる。

なお、本研究は全3部から構成される。第1部(第1章、第2章)では、文献研究を行い、本研究で実施する研究の理論的・社会的背景を整理した。第2部(第3章から第6章)では、筆者の経験を対象とするオートエスノグラフィーの実践研究を行った。第3部(第7章)では、総合考察を行った。以下では、各章ごとの概要について示していく。

第1部 第1章 社会的背景：転機研究における「個人と社会との相互作用」のアプローチ¹

「転機」は、キャリア論においても中心的な概念である。従来の転機研究では、個人と社会文化的問題が切り離されてきた。そこで第1章では、転機研究の展開をレビューし、現代のキャリア情勢や、文化心理学の理論的進展を踏まえた上で、転機研究の新しい視座を探ることを目的とした。まず、転機研究の主要な論点を、転機の「発達のアプローチ」と「偶発性アプローチ」に整理した。「発達のアプローチ」では、キャリア成熟や自己効力といった、転機に対する個人の心理的な“準備”に関わる重要な知見だけでなく、心理的危機とその変容のプロセスに関する知見が蓄積されてきた。一方、「偶発性アプローチ」は、社会環境が複雑かつ不確実なものに変化したことに伴い展開されてきたものであり、個人が偶発的な出来事を主体的に成長の機会にするための個人の態度が扱われてきた。

以上の整理を踏まえて、第1章では、転機研究の今後の展開として、転機を社会と個人との相互作用において生じる“媒介”(物語や記号)としてみなす「個人と社会との相互作用」ア

¹ この章は、土元・サトウ (2019)を一部修正したものである。

アプローチを提案した。転機の話は単に個人の成長のための信念を示しているだけでなく、個人の信念と社会的規範との関係の中で作用し、成長という行為を可能にしたり、制約を与えたりする側面があると考えられる。また、転機は特定の瞬間であり重要な意味を持つというだけでなく、他の未来の行為をガイドする機能を持つ(つまり、過去の転機が現在の転機に影響することがある)。このような転機の意味の、人生を通した移行過程に焦点を当てることが重要である。従来のアプローチに基づく転機研究では、転機が未来の行為に対して及ぼす影響については十分に扱われてこなかった。「個人と社会との相互作用」アプローチによって、未来の転機が、過去の転機との関係や、社会的関係の中で生み出され変容していく様相を理解することが可能になる。

第1部 第2章 理論的背景：オートエスノグラフィーの方法論と文化心理学

本研究で用いたオートエスノグラフィーは、研究者が有している文化(own culture)を記述的に探究する学問領域・研究アプローチを指す。オートエスノグラフィーの対象は狭い意味での「研究者自身の経験」に限定されるものではなく、「研究者を含むシステムの経験」(つまり、他者を含む)を指す。したがって、オートエスノグラフィーにとって重要な点は、研究者が有している(own)文化——それは個人が有する文化だけでなく、他者と共有する文化もある——を理解することであり、その理解のために自ら動く(auto)ことであると考えられる。

オートエスノグラフィーは、1970年代後半に文化人類学や社会学の領域で提唱され、2000年以降、様々な方法論が花開いてきた(図1)。2020年には専門雑誌『Journal of Autoethnography』が発刊されるなど、社会科学の領域で大きな注目を集めている(図1)。

一般的に、心理学は自然科学を志向し、その研究対象を客体化する傾向が強いものの、歴史的に振り返るなら、一人称的(主観的)な経験を理解するための方法は試みられてきた。しかしながら、心理学の視点からのオートエスノグラフィー実践や、その方法論に関する体系的整理・議論はほとんどなされてこなかった。また、現在オートエスノグラフィーは、「喚起的」か「分析的」

かという、スペクトラムとして捉えられているが(図2)、2000年代以後に現れた様々な志向のオートエスノグラフィーを、この1次元で捉えることには限界がある。

1970年代後半～

- 1979年 Hayanoが「オートエスノグラフィー」を提唱
- 社会科学の様々な領域で個人的ナラティブや、主観性、内省の意義が主張される。
- 1986年『文化を書く』出版

1990年代

- EllisやBochnerらが筆頭となり、オートエスノグラフィーの著作が生み出される。

2000年代

- 2000年『The Handbook of Qualitative Research (2nd ed.)』にオートエスノグラフィーの章が含まれる。
- 2013年『Handbook of Autoethnography』
- 2020年 学術雑誌『Journal of Autoethnography』

図1 オートエスノグラフィーの歴史

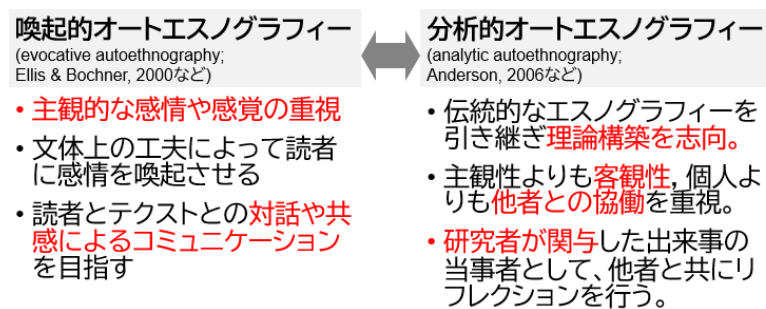


図2 オートエスノグラフィーの主流の方法論

そこで第2章では、オートエスノグラフィーの方法論的志向の特徴を整理すること、および文化心理学とオートエスノグラフィーとの接点を探ることの2つを目的として、先行研究をレビューし理論的検討を行った。結果的に、オートエスノグラフィーの方法論を整理する枠組みとして「研究関心」(個人－文化)と「視点」(主観的－相互主観的)という二次元を設定し、各象限を「自叙伝的」「相互行為的」「エスノグラフィー的」「熟慮的」志向と設定した(図3)。

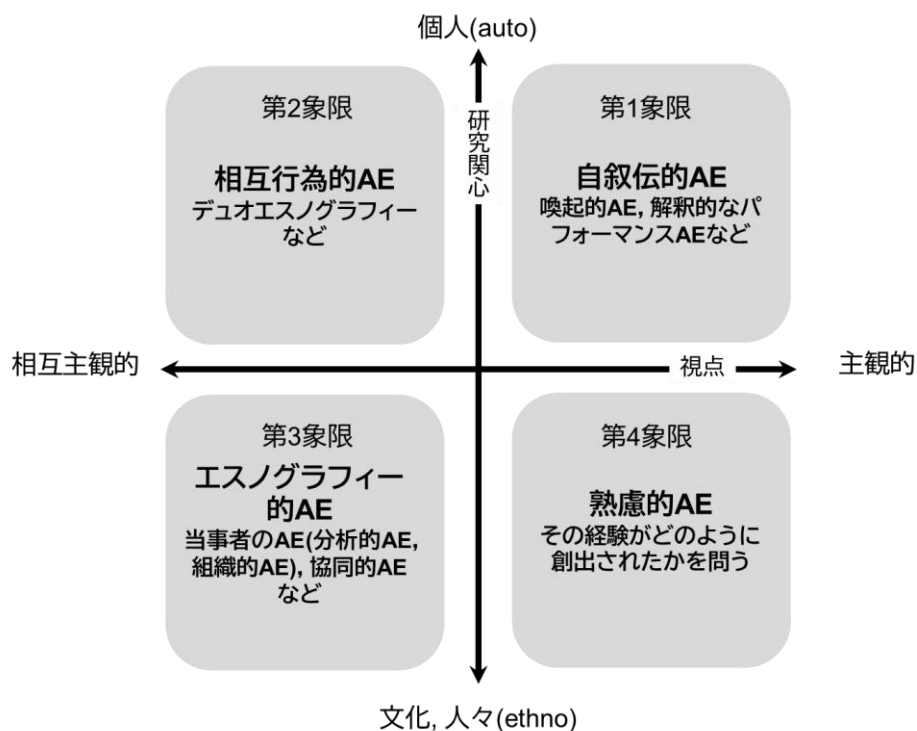


図3 オートエスノグラフィーの各方法論における研究関心(縦軸)と視点(横軸)
(注:AE=オートエスノグラフィーを表す。)

ここで熟慮的オートエスノグラフィーとは、個人的経験の記述に留まらず、ある経験がどのように創出されたか(資源やきっかけ、プロセス、意味、アイデンティティ等)を問うことで個別の経験の普遍化や一般化を目指す志向をいう。相互行為的オートエスノグラフィーとは、研究者が他者とともに特定の経験を探究し、その研究プロセスにおける対話をもとに、経験を理解しようとする志向をいう。その上で、「相互行為的」志向における、研究者の視点の相対化による心理的現象を組織化する過程の理解と、「熟慮的」志向における経験の創出過程における文脈の精緻な記述が文化心理学との接点であり、これらの志向における方法論的課題であることを指摘した。

第2部 第3章 オートエスノグラフィーの構成

第1部の結果から、研究者が持つ独自の観点を分析的に深めたり、他者の経験にも転用可能なものとしていくためには、単一の視点だけでは限界があると考えた。本研究では、「視角の体系的トライアングレーション」(Flick, 1992; Flick, 2017/2007)を参考に、複数の理論的・方法論的の視角からオートエスノグラフィーを記述する方略をとった(表1)。

表1 筆者が「有する文化」の分析のための視角

	研究1	研究2	研究3
理論・方法論	文化心理学	ナラティブ論	体験過程理論
方法	Auto-TEM, 対話的自己理論	支援者インタビュー	TAEステップ, メタファー

研究1(第4章)では、筆者のキャリア選択のプロセス及び、それをガイドした社会や文化、他者(すなわち、具体的なキャリア支援経験)に焦点を当てる。そのために、文化心理学の方法である複線径路等至性モデリングによるオートエスノグラフィー(Auto-TEM)、対話的自己論を用いる。筆者の転機を含んだキャリア選択はどのような過程をたどり、そこにはどのような社会的・文化的なガイドが見られたのかについて明らかにしていく。

研究2(第5章)では、筆者の転機にとって重要な他者であったA先生に、日常的なキャリア支援実践と、筆者の修士課程時における支援について「支援者インタビュー」を行う。そこで生成される語りから、大学教員の日常的なキャリア支援に対してどのような示唆が得られるのかについて検討する。

研究3(第6章)では、TAEステップおよびメタファーを用いる。筆者の経験した転機に関する主観的な意味感覚(フェルトセンス)を出発点として、転機を促すキャリア支援について検討する。また、どのようなキャリア支援が転機を促すと考えられるのか、その主観的理論(「よいキャリア支援」理論)を生成する。

第2部 第4章(研究1) 教員志望学生のキャリア選択過程 —Auto-TEMを用いた人生径路の探究

第4章では、キャリアの分岐点において個人がどのようにキャリア選択を行ったか、人生全体の文脈の中でその選択はどのような意味を持つかを明らかにするために、「教師になる」というキャリア選択の過程を題材として、その記述的理解を試みた。そのために、オートエスノグラフィーのアプローチを用いた複線径路等至性モデリング(Auto-TEM)と対話的自己理論による分析を行った。Auto-TEMによる分析を通して、大学院生があるキャリア相談における転機において「教師になる」意味を問い直し、「大学教員・研究者として学生の学びをデザインしながら学問を探究したい」という目標(等至点)が見出される過程を一つのモデルとして提示した。

本研究から得られたキャリア選択支援への示唆として、学生が「点的目標」ではなく「域的目標」を目指すことで、レジリエンスを高めることに繋がるという点を指摘した。また、本研究の限界およびキャリア選択への示唆として、キャリア支援においては現実には人が歩んでいる径路だけでなく、その径路に影響を及ぼす「影の径路」についても探究していくことが必要であることを指摘した。最後に、Auto-TEMでは、個人の人生径路や、それに関わった社会的諸力を可視化し分析するための概念ツールをガイドとして用いることで、「亀の目」(人生径路を歩む主体の一人称的視点)と「鳥の目」(人生全体のプロセスに関与した集合的文化)の双方の視点から、個人の人生径路と社会との関係とを見ていくことが可能であるという点で、キャリア研究・キャリア教育の方法として意義があることを指摘した(図4)。

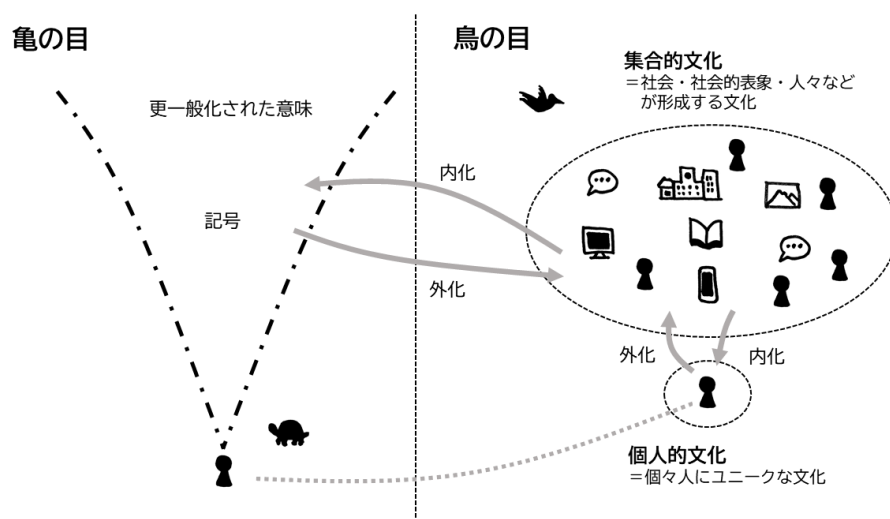


図4 「鳥の目」と「亀の目」(ジトゥン(2015)をもとに、T. Zittoun 氏の助言を得て作成)

第2部 第5章(研究2) 大学教員による日常的なキャリア支援 —「支援者インタビュー」による検討

第5章では、大学教員による日常的なキャリア支援がどのように行われているのか、どのような支援が学生のキャリア発達を促すために有効かについて検討することを目的とした「支援者インタビュー」による研究を行った。具体的には、筆者が修士時代の指導教員であった大学教員(A先生)のキャリア支援の枠組みを理解することを目的とした。本研究では、まずA先生が自身のキャリア支援実践をどのように自己認知しているのかという「実践モデル」をA先生と筆者の共同で構築した。そのモデルから、A先生は、学生にとっての他者や社会に対する〈やりたいこと〉を、学生と共に構築するための支援を行っていることが明らかになった。

「やりたいこと」という語はキャリア研究の文脈において多用されてきた。一方、A先生は「自分のためじゃなくて、社会のためとか人のため」の〈やりたいこと〉を、学生が〈自分で動く〉過程で見出すことが重要であると語っていた。本研究では、こうしたA先生の考え方をもとに、従来のキャリア研究とA先生の〈やりたいこと〉の差異について検討した。その結果、これまでの「やりたいこと」の議論を、(1)「能動的」か、「受動的」か、(2)「自己関心駆動型」か「社会関心駆動型」かによって区分できた(図5)。ただし、図5は、学生の自己理解としての区分ではなく、大学生、大学院生を指導する大学教員の視点から見た「やりたいこと」の区分である(つまり、「教員-学生」の関係性の中で学生から語られたり、表現される「やりたいこと」)。この区分を用いれば、学生が能動的に「やりたいこと」を見いだしたとしても、それが自己志向的で社会に結び付けられていない問題(「やりたいこと志向」、フリーター問題など、第2象限)や、就職活動のような社会からの方向付けによって、受動的に「やりたいこと」を作り出すことになり、自己のアイデンティティと乖離している問題を整理できる(第4象限)。

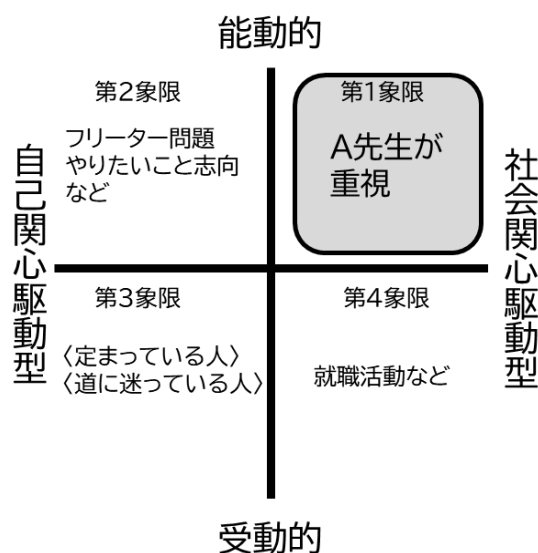


図5 大学教員の視点からみた学生のやりたいことの区分

最後に、「支援者インタビュー」の利点として、支援者の語りを身体的に理解しやすいこと、インタビューの実践自体が、インタビューでの対話や研究を促進する「促進的記号」になること、一方で改善すべき点(欠点)として、研究者の恣意的な解釈が不可避免的に含まれていること、インタビューの文脈を捨象してしまうことを指摘した。

第2部 第6章(研究3) 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚——TAEステップを用いた理論構築²

第6章では、筆者にとっての「成長の瞬間」を生み出した「よいキャリア支援」の意味感覚がどのようなものか、明らかにすることを目的とした。また、そのような成長の機会を生み出すことが可能な支援のあり方について考察した。「よいキャリア支援」理論を生成するための基本的な分析方法としては、TAEステップを用いた。さらに、読み手が理論を直観的に理解できるように、その理論をメタファーによって表現・記述した。

結果として、「よいキャリアについての自らの信念」という原初的テーマから、次の「よいキャリア支援」理論を導いた。

「よいキャリア支援」理論

- ①夢の受け止めは誠実な他者の夢への向き合い方である
- ②誠実に他者の夢と向き合うことで、自分と他者の夢の間に繋がりができる
- ③繋がりができることで、お互いに夢への自覚を持つことができる
- ④夢への自覚を持つことが人々の成長にとって欠かせない

この理論は、被支援者が「夢を自覚」すること、他者との「夢の繋がり」をつくること、そのために、支援者・被支援者ともに「夢を受け止める」ことが重要であるということを示している。ただし、この理論は、筆者にとっての「主観的」な言葉の結びつきを示しており、他者にとって直感的・身体的に理解できるものではない(例えば、「夢」という語と「自覚」という語の結びつきは、主観的である)。そこで、この理論を他者からの理解に開かれたものにするために、「夢に誠実に向き合い(夢への自覚)、他者と夢の繋がりをつくる」観点を、「卓球ラリー・メタファー」として表現した(図6)。

² この章は、土元・小田・サトウ(2020)を一部修正したものである。



よいキャリア支援とは卓球ラリーである。

支援者・被支援者の「夢」がボールであり、卓球のラバーの柔らかさで「受け止め」た上で、他者にボールを返していく。

ラリーでは、「誠実に」他者と向き合いながら、夢同士を「繋げて」いく。ボールの動きを見極めるように自分の夢を「自覚」することが「成長」にとって欠かせない。

図6 卓球ラリー・メタファーによる理論拡張

卓球ラリー・メタファーにおいては、偶発的かつ複雑なキャリア環境にありながら、個人が主体的にキャリアを方向づける様相を描けるだけでなく、ナラティブ論に基づくキャリア支援における「解釈」「対話的關係」「主観的時間」といった重要な側面を記述することができると考えられる。意味感覚の言語化は、個々人に暗在するユニークな身体知を、他者と共有し「交差」(Gendlin, 2004)³するための方法として意義があることが明らかになった。

第3部 第7章 総合考察

第3部 第7章(総合考察)では、以上の知見を踏まえ、総合考察を行った。

「転機のオートエスノグラフィー研究」の展望

「転機」は、これまで社会学のテーマとして扱われてきた。社会学の転機研究は、量的調査が主流であり、「人々」の転機がその研究の対象となっていた。しかし、これらの研究では「多くの人にとって共通の転機における意味や役割」という限定的な側面を扱ってきた。ただし、転機を理解する上では、転機に対する主観的意味に肉迫していくことも必要である。「今、ここ」を生きている個人がどのようにして、ある出来事を転機とみなすようになるのか、また、その転機にはどのような意味づけがなされているのかを理解することが重要である。

社会への還元や具体的な問題解決が要求されることの多い現代の社会科学の立場からは、オートエスノグラフィーのように自分を研究することの意義を正当化するのは、障がいや

³ ここで、交差とは、ある体験から見出した形式を取り出し、別の体験にあてはめて感じてみることである(得丸, 2010)。Gendlin (2004/2004)によれば、自分自身の特別な用語を作りだしそれを保つことができれば、他の人の用語とそれらを「交差」させることができ、それによって、自らの用語の持つ力と暗黙の複雑さがいっそう豊かになるという。

病いの当事者研究などの部類に入らない限りは難しいとされている(井本, 2013)。しかし、研究の意義は社会的カテゴリによってのみ正当化され得るものではない。なぜなら、個人にとって主観的に重要な意味があり、その人の人生を劇的に変容させる出来事を研究することは、心理学にとって基本的かつ本質的な問いだからである。この点が、転機研究とオートエスノグラフィーとの接合点となる。

それだけでなく、オートエスノグラフィーの実践は、その人自身のライフを新しい視点から見つめ直すことに繋がる。オートエスノグラフィーは、「特定の個人を対象としたアクション・リサーチ」であり、その人の癒やしや自己理解としての意味を持つ実践である(Ellis & Bochner, 2006/2000)。この意味で、オートエスノグラフィーの物語、特に転機を題材とした物語は、その人の人生を進めていくために重要な「生成的物語、つまりライフ(生, 人生)を変化させていく物語」(やまだ, 2000)となる。オートエスノグラフィーは、これまでの経験を時には他者とともに意味づけ、人生のナラティブにしていく実践である。その実践自体が、その人の人生を変える「転機」となり得るといえる。

転機を促すキャリア支援への示唆

ここまでの研究成果を踏まえ、「転機を促すキャリア支援」のモデルを提案した。転機において「能動的」かつ「社会関心駆動」の目標を生み出すことが重要であることが明らかになり、研究 1 から 3 までの成果が、そのような目標生成の転機を促す具体的支援として位置づけられた(図 7)。

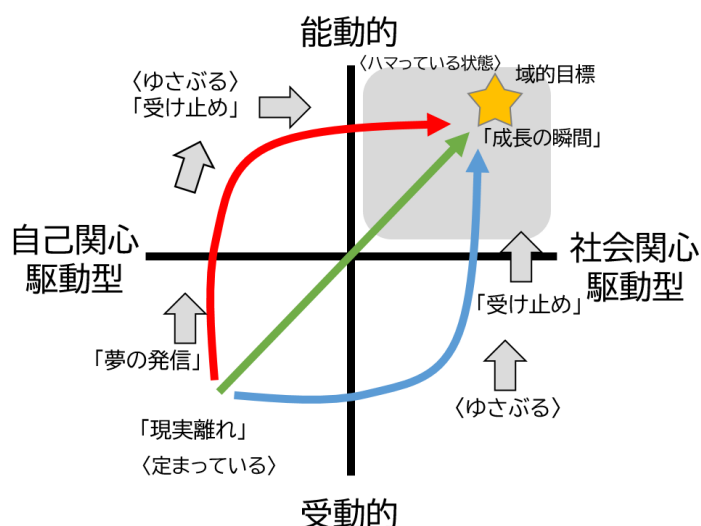


図7 「転機を促すキャリア支援」のモデル

これらの支援は、TEM という社会的方向付け(SD)や社会的助勢(SG)に相当する。学生が分岐点(転機)において、「能動的・社会関心駆動型」のキャリア選択をすることは容易では

ない。ともすれば、「周囲の友人が公務員になりたいと言っているから、自分も公務員を目指す」ような「受動的・社会関心駆動型」の目標や、「自分がやりたいことにとにかく挑戦する」ような「能動的・自己関心駆動型」の目標に留まってしまう学生もいるだろう。そうした目標を、学生の成長に結びつけるためには、支援者からのガイドが必要である。本研究で示したガイドは、その一例だといえる。

オートエスノグラフィー研究への示唆——他者に関かれた自己理解

この博士論文でのオートエスノグラフィー実践の通奏低音をなす考え方は、「他者(社会)に関かれた自己理解」としてのオートエスノグラフィー実践である。オートエスノグラフィーは、「自己陶酔的」「ナルシスト的」な記述になる可能性がある」と指摘される(Anderson, 2006; 沖潮(原田), 2013)が、そのような記述は、本研究が目指してきたオートエスノグラフィーではない。ここでは、本研究からオートエスノグラフィー研究への示唆を述べる。

そのために、Valsiner (2016)による「I(主体としての自己)-Me(客体としての自己)-世界」の関係を示すスキームを援用する(図 8)。Valsiner (2016)は、ここでの I と Me(内的ループ)、Me と世界との記号の調整(mediation)のプロセスが「文化」であるという。ここで重要なのは、自己は「客体としての私 Me」を媒介として「世界とそこにいる他者」と関係しているという点である。換言すれば、内的自己(I)の持つ記号は、外的自己(Me)との調整関係にあるが、社会とは関係しづらい(Valsiner, 2016)。

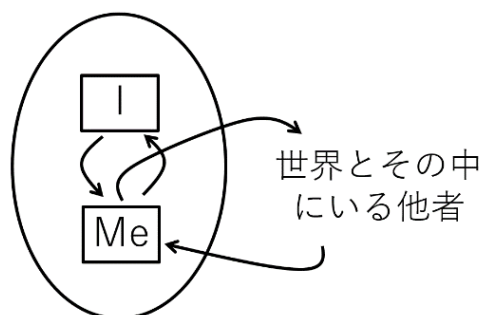


図 8 Valsiner の文化心理学における「I-Me-世界」の関係スキーム(Valsiner, 2016)

この図からは、I にとっての記号だけで自分の経験を伝えても、他者にはその記号が理解できないということが示唆される。例えば、筆者は研究 3 で「夢の自覚」ということばを用いたが、こうした「主観的なことば」のみで他者に自分の主観的な経験を伝えようとしても、十分に理解されない(その他者が記号として理解できない)場合がある。経験の主体 I の記号のみでの語りは、社会との関係性を欠いたものであり、「自己中心的」なものである。

もちろん、I の持つ独特の感覚を理解することは重要であるし、I と Me を往還する中で得られる気づきもある。ただし、本研究では I の持つ記号のみを「ありのまま」伝えるのではなく、Me のことばに「翻訳」(他者に関かれ、これまでの主観的なことばとは異なること

ばで表現)する方法を考えてきた。オートエスノグラフィーが目指す「自己理解とともに、他者理解が生まれてくる」(Ellis & Bochner, 2006/2000, p.135)側面は、Iとしての自己理解だけでなく、Meと世界(他者)との関係を含んだ自己理解だと考えられるからである。

オートエスノグラフィーでは、主観的なことばを社会へと関係づけていく必要がある。そうでなければ、単なる自伝(autobiography)である。つまり、オートエスノグラフィーでは、他者(社会)に自己の経験を伝えるためには、社会と関係しているMeのことば(つまり、「社会的なことば」)が必要になる。言い換えれば、Meのことばで語るということは、ある「社会」と関係するMeのポジション(I-ポジション)から自分の経験を語るということでもある(対話的自己理論(Hermans & Kempen, 2006/1993)を参照)。

それでは、Iとしての自己が持つ独特の感覚や意味を、いかにMeとしてのことばに「翻訳」できるだろうか。そのためには、自己(I)のことばを客体化・相対化しなければならない。そこで、質的研究の諸方法が有用である。近年、様々な質的研究法が登場し、そのようなIとしての意味を公共化するための方法が複線化している。ただし、それぞれの方法が、どのような過程で自己の経験を組織化でき、どのように他者理解を深めていけるかについては、十分に明らかになっていない。これは、自己の経験を他者と結びつけ、豊かにしていくためのキャリア教育／研究としてオートエスノグラフィーを活用していく際に重要な課題であり、今後の研究が求められる。

引用文献

- Anderson, L. (2006). Analytic autoethnography. *Journal of Contemporary Ethnography*, 35(4), 373–395.
- Ellis, C., & Bochner, A. P. (2000). Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Researcher as Subject. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of Qualitative Research* (2nd ed., pp. 733–768). SAGE. (エリス C.・ボクナー A. P. (2006). 自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性——研究対象としての研究者(藤原顕, 訳). デンジン N. K.・リンカン Y. S. (編) 質的研究ハンドブック 第3巻 (平山満義, 監訳) (2nd ed., pp. 129–164). 北大路書房.).
- Flick, U. (1992). Triangulation Revisited: Strategy of Validation or Alternative? *Journal for the Theory of Social Behavior*, 22(2), 175–197.
- Flick, U. (2007). *Managing Quality in Qualitative Research*. SAGE. (フリック U. (2017). 質的研究の「質」管理(上淵寿, 訳). 新曜社.).
- Gendlin, E. T. (2004) Introduction to “Thinking At the Edge”. *The Folio*, 19, 1–8. (ジェンドリン E. T. (2004). 「TAE (辺縁で考える)」への序文(村里忠之・村川治彦, 訳). <http://previous.focusing.org/jp/tae-intro.html>
- Hermans, H. J. M., & Kempen, H. J. G. (1993). *The dialogical self: Meaning as movement*. San Diego: Academic Press. (ハーマンス H.・ケンペン H. (2006). 対話的自己——デカルト／ジェームズ／ミードを超えて (溝上慎一・水間玲子・森岡正芳, 訳). 新曜社.).
- 井本由紀. (2013). オートエスノグラフィー. 藤田結子・北村文 (編) ワードマップ 現代エスノグラフィー——新しいフィールドワークの理論と実践 (pp. 104–111). 新曜社.
- 木戸彩恵. (2019). 文化心理学の基本的射程. 木戸彩恵・サトウタツヤ (編) 文化心理学——理論・各論・方法論 (pp. 3–13). ちとせプレス.
- 沖潮(原田)満里子. (2013). 対話的な自己エスノグラフィー——語り合いを通じた新たな質的研究の試み. 質的心理学研究, 12, 157–175.
- Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 16(3), 282–298.
- 得丸さと子. (2010). ステップ式質的研究法——TAE の理論と応用. 海鳴社.
- 土元哲平・サトウタツヤ. (2019b). 転機研究における「個人と社会との相互作用」のアプローチ. キャリア教育研究, 37(2), 35–44.
- 土元哲平. (2020). 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. 立命館大学大学院文学研究科 博士論文(未刊行).
- 土元哲平・小田友理恵・サトウタツヤ. (2020). 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚——TAE ステップを用いた理論構築. 質的心理学研究, 19, 46–67.
- Valsiner, J. (2016). *An Invitation to Cultural Psychology*. SAGE.
- やまだようこ. (2000). 人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学. やまだようこ (編) 人生を物語る——生成のライフストーリー (pp. 1–38). ミネルヴァ書房.
- ジトゥン T. (2015). 移行, イマジネーション, そして TEM(木戸彩恵, 訳). 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 理論編——複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp. 97–100).